

SCORM 規格普及の現状と課題

Current Status and Future Issues of SCORM Specification Dissemination

仲林 清^{†, ††}

Kiyoshi Nakabayashi

[†]千葉工業大学

Chiba Institute of Technology

^{††}熊本大学

Kumamoto University

e-Mail: knaka@net.it-chiba.ac.jp

あらまし 本報告では e ラーニングベンダや利用者を対象として SCORM 規格の普及状況と課題に関するアンケート調査を行った結果を示す。約 8 割の回答者が SCORM2004 をすでに利用ないし利用を予定している、標準規格に対する信頼やコンテンツ再利用性・開発効率化の観点から規格を利用している、といった状況が明らかになった。

キーワード e ラーニング標準化, SCORM, SCORM アセッサ, 標準規格普及

1. はじめに

米国 ADL が策定した e ラーニングコンテンツの標準規格である SCORM (Sharable Content Object Reference Model) は世界的に広く普及しており、国内では日本イーラーニングコンソシアムが中心になって、仕様書の翻訳、講習会の開催、技術資格制度の立上げ・運営を推進してきた。SCORM 技術の普及と課題について、2008 年に調査を行った¹⁾が、本稿ではその後の状況を調べるため 2011 年に行った調査の結果を示す。

2. 調査の概要

前回の調査では、技術資格 (SCORM アセッサ) 保有者を対象としたが、今回はより幅広く、規格準拠製品の利用者や規格を利用していない e ラーニング関係者も対象とした。今回は、規格利用者 45 名に対する調査結果を中心に示す。調査期間は、2011 年 2 月～4 月で、Web によるアンケート調査を行った。SCORM 技術資格保有者のほか、日本イーラーニングコンソシアムのメンバ企業、メールニュースの受信者、e ラーニング関連展示会の参加者などに対し、メールで回答の呼びかけを行った。

3. アンケート結果

3.1 回答者の内訳

表 1 に回答者の規格の利用の立場を示す。LMS やコンテンツの開発者、e ラーニング導入者など幅広い側の立場の回答者が含まれている。

表 1 規格利用の立場 (n=45, 複数回答)

SCORM 準拠 LMS 開発	12
SCORM 準拠オーサリングツール開発	8
SCORM 準拠レディメイドコンテンツ (一般顧客への販売を目的に作成するコンテンツ) 開発	17
SCORM 準拠カスタムコンテンツ (特定顧客からの発注を受けてから作成するコンテンツ) 開発	30
SCORM 準拠独自コンテンツ (組織内のみでの利用を目的に作成するコンテンツ) 開発	15
SCORM 準拠 LMS 営業・販売	11
SCORM 準拠コンテンツ営業・販売	12
SCORM 準拠 LMS 選定・導入・利用	11
SCORM 準拠コンテンツ選定・導入・利用	12
その他 (具体的に)	1

3.2 利用する規格のバージョン

利用している SCORM のバージョンを尋ねた結果を表 2 に示す。全体で 80% が新しい SCORM 2004 を既に利用、ないし、利用を検討している。前回の調査に比べると、実際に SCORM 2004 を使用している割合が 30% から 40% に向上している。

表 2 規格のバージョン (n=45)

現在も今後も SCORM 1.2 のみ利用	9	(20%)
現在は SCORM 1.2 だが、今後は SCORM 2004 も予定・検討している	18	(40%)
現在 SCORM 1.2 と 2004 両方を利用	16	(36%)
現在 SCORM 2004 のみ利用	2	(4%)

3.3 コンテンツ作成本数

回答者が所属する組織で作成したコンテンツの種別と本数を表 3 に示す。前回の調査同様、レディメイドコンテンツよりも、受注型のカスタムコンテンツが多く作成されている傾向となっている。カスタムコンテ

ンツについては、「1000本」、「年間100以上」という回答も見られた。独自コンテンツについても、「200本」、「300本」という回答が見られ、SCORM規格が完全に実用ベースで利用されていることがわかる。

表3 所属組織作成コンテンツの種別・本数 (n=45)

種別	作成本数						
	0	1 ~ 5	6 ~ 10	11 ~ 20	21 ~ 50	51 ~	不明
レディメイド	14	2	4	0	5	12	8
カスタム (受注型)	7	3	3	4	6	14	8
独自 (組織内利用)	14	7	3	1	4	9	7

3.4 コンテンツ構成

コンテンツのSCO数、学習時間を調べた結果を表4、表5に示す。SCO数については前回と同様の傾向で20SCO程度のもものが多くなっている。学習時間は60分前後のもものが多くなっている。

表4 標準的コンテンツのSCO数 (n=45)

1	2~5	6~10	11~20	21~50	51~	不明
3	5	7	10	8	5	7

表5 標準的コンテンツの学習時間 (分, n=45)

~10	10~20	20~40	40~60	60~90	90~	不明
0	5	8	15	9	5	3

3.5 LMS 種別数

コンテンツを搭載するLMS種別数を調べた結果を表6に示す。数種類の利用が大半であるが4種類以上というケースもかなりみられ、10種類以上という場合もある。これも前回の調査と同様の傾向になっている。

表6 LMS 種別数 (n=45)

1	2~3	4~5	6~9	10~	不明
17	17	5	2	2	2

3.6 規格の評価

SCORMを使うようになったきっかけ・導入に際して期待した効果と、実際に使用して感じる効果をおのの4件法で調査した結果を表7に示す。前回の調査では、期待した効果に対して実際の効果が低下していたが、今回はほぼ変わらないか、逆に向上が見られた。値が高かったのは、「顧客要望対応」、「保有LMSがSCORM対応していた」、「標準規格なので安心」の順で、次いで、「コンテンツ再利用」、「開発工程標準化」などとなっている。

表7 規格導入前後の効果 (4件法, n=45)

導入前後	導入前		導入後	
	Av.	S.D.	Av.	S.D.
きっかけ・効果				
顧客要望対応	3.2	1.0	3.2	0.8
保有LMSが対応	3.1	1.0	—	—
標準規格の安心感	3.0	0.7	3.0	0.7
コンテンツ再利用性	2.8	0.8	2.8	0.8
コンテンツ開発効率化	2.6	0.9	2.6	0.8
開発工程の標準化	2.6	0.7	2.6	0.7
扱い製品の増加	2.5	0.9	2.6	0.7
規格対応製品の多さ	2.5	0.8	2.6	0.8
規格関連情報の多さ	2.1	0.7	2.3	0.7
外注先選択肢の増加	2.1	0.9	2.3	0.8
ベンダの勧め	1.7	0.8	—	—

3.7 資格取得動機

資格取得者・予定者を対象に取得の動機を調べた結果を表8に示す。「スキル向上」が最も高く、ついで、「技術力アピール」、「組織の指示」となっている。これは前回の調査とほぼ同様である。前回に比べて、顧客要望対応が高くなった。

表8 資格取得動機 (4件法, n=34)

動機	Av.	S.D.
スキル向上	3.2	0.7
技術力アピール	2.8	0.6
組織の指示	2.8	1.0
コンテンツ開発効率化	2.7	0.6
顧客要望対応	2.5	0.9
入札条件適合	2.3	1.0

4. まとめ

本調査で、SCORM 2004の浸透、コンテンツ数に見るSCORMの実用ベースでの普及、導入効果に関する認識の向上などが明らかになった。今後、得られたデータをもとにより深い分析を行う。

謝辞

本調査にご協力いただいた日本イーラーニングコンソシアム標準化推進委員会はじめ関係者の方々に謝意を表します。

参考文献

- (1) 仲林 清, 熊沢 剛, 宮内 浩, 他: SCORM アセッサ制度に見るSCORM規格普及の現状と課題, 教育システム情報学会誌, Vol.26, no.3, pp.273-283 (2009)